



印
西



**MAKE INZAI
ORIGINAL**

発行：印西市

メイクインザオリジナル Q

Year.02
2020-2021

印西の勝手な未来を語る創作落語、印西の色を織りなす個性派たちが集う連続インタビュー、「特殊設定ミステリー」の次代を担う気鋭の推理作家のエッセイ……。とことん真面目に「不真面目」を追究する千葉県印西市PRが、二〇二〇年度に作ったものとは？ ウェブメディア『メイクインザイオリジナル』で公開され、(ごく)一部で話題を呼んだ妙に濃いコンテンツを、紙のかたちで再編集。知られざる印西の底力をご覧ください。



MAKE INZAI ORIGINAL

Year.02

2020-2021

目録

● Project 01

印西妄想落語

…… 02



印西の未来は、頭の中にある。
落語家・金原亭馬治さんが、
「未来」と対話する創作落語。

● Project 02

インザイのジンザイ。

…… 08



オリジナルって、身近にいる。
印西各地で個性を放つ
「人材」の皆様に、
「私と印西」を語ってもらいました。

● Project 03

ミステリーインインザイ

…… 16



この地に生まれた小説家が、
印西の謎を解き放つ。
奇想のエッセイ全編収録。

次年度予告

…… 32

メイクインザイオリジナル

印西

の
色を織りなす “オリジナル”。

「メイクインザイオリジナル」は「住みよい街」なのに、なかなか「らしさ」が伝わりにくい印西市で、新しい「オリジナル」を作り出すプロジェクト。二〇一九年にスタートし、二年目となる二〇二〇年には、三つの新しいコンテンツをリリース。「創作落語」に、印西各地の「人材」への連続インタビュー、印西発の推理小説家が書く本格推理エッセイ。登場する人やモノの濃厚な「色」が、新しいオリジナルを織り成していくはず。そんなプロジェクトの歩みを、紙のかたちでゆっくり味わってもらえたら幸いです。

印西妄想落語

未来のオリジナルは、
あなたの心の中にある。

ここは千葉県印西市、
チーバくんの目ん玉のあたりだ——。
『印度じゃなうよ、印西市』『INZAI BALANCE』にっへ、
二〇二〇年度の印西市PR動画は、なんと創作落語。
印西在住の落語家で真打の金原亭馬治さん。
馬治さんが印西のあれやこれをボヤくと、
なんと「未来の馬治」がどこからか現れ……。
ポップでグルーヴィな「妄想」が炸裂。
ここでは、印西ならではの情報量が多い
『妄想落語』の世界を誌面で紹介していきます。

とほほほほほ、とほほほほほほほ……。お〜い、へへっ、おい、
お〜い、おい。ん？どこからか……。声が？ここだよ、ここ。ここ、ここ。
ここは**千葉県印西市**。チーバくんの目ん玉の辺りだ。そう
じゃねーよ。ここだよ、ここ！**なんだ、オメエ！**おめえ一体、誰
なんだ？俺かい？へへ。俺は、**未来**からやってきた**お前**。何を
一体、泣いてるんだい？それがよ、印西が**住みよさ**ランキング
一位じゃなくなっちゃったんだよ。俺だけの「**愛**」じゃどうすることも
できなかったああ……。ハハハ、愛？……。心配するな、未来はそんなもん
じゃない！**未来の印西市**はなあ、夢のある**奇妙**キテレツ
な街になってるよお。

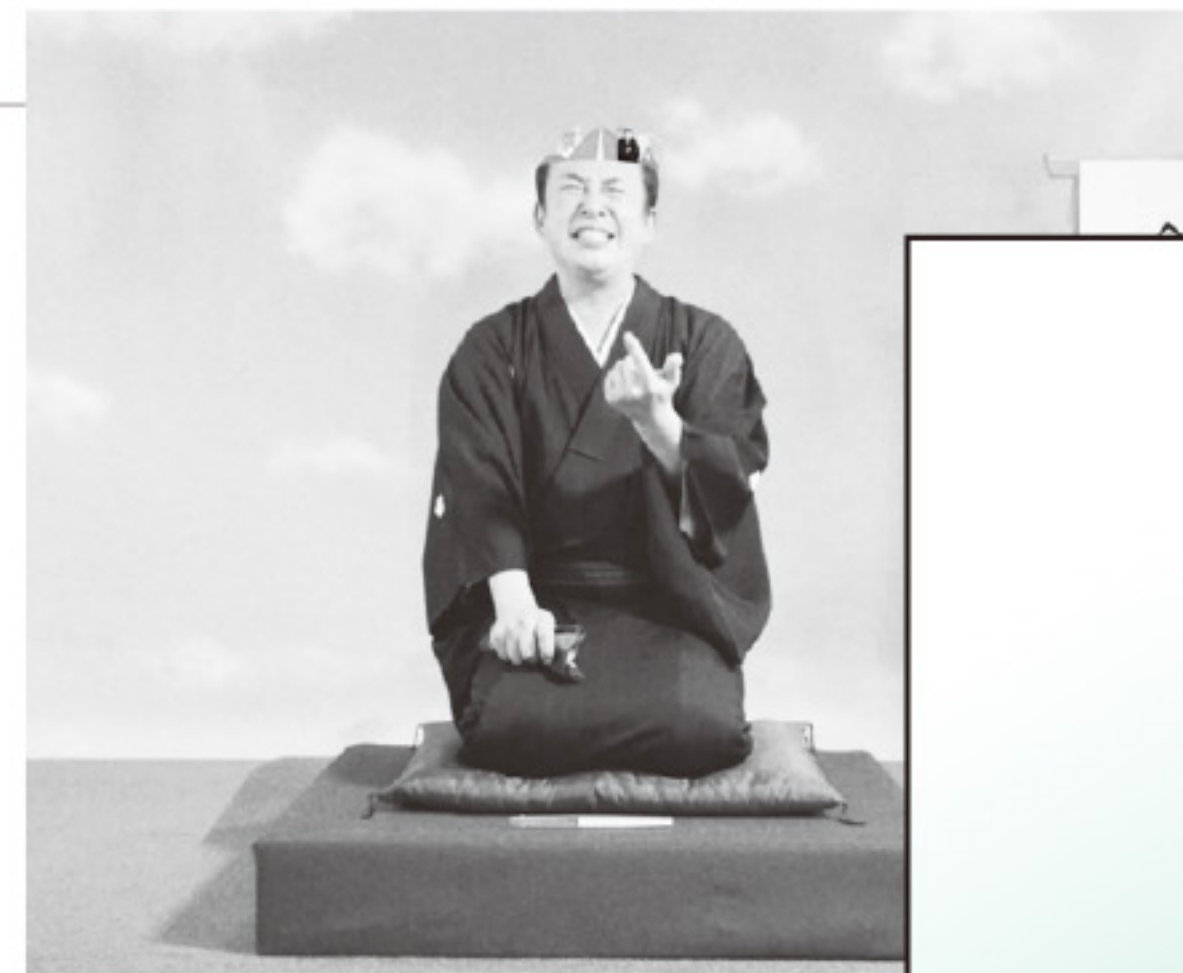
なにしろ印西の中には「**愛**」があるからなあ。



「印西妄想落語」は
YouTubeで
ご覧いただけます。

印西といえば「印大八景」？

未来 愛？お前は、印西の何を愛してるんだ？
今 それは……、「印西八景」のあるところだあ！
未来 それじゃあ聞くが、八箇所言ってみな！
今 コストコだろ……ジョイフルホンダ、ビッグホップ、東京インテリアア！
未来 そりゃおめえ、「印大八景」じゃないか！心配するな、未来はそんなもんじゃない！
未来の印西市はなあ、夢のある奇妙キテレツな街になってるよお。



頭の中から突如現れた「未来の馬治」に印西のよさを伝えようとする今の馬治。印西の豊かで文化価値にあふれた「印西八景」を語ろうとする。けれど口からでてくるのは、印西といえばまず頭に浮かぶ某大型店舗をはじめとする「大きな」名所。実際に8つあるかは謎です。

印西を陰ながら支える印西市のゆるキャラ「いんザイ君」が、PRムービーに初登場。コスモス畑から生まれた謎のサイも、百年続けば誰もが知る存在に。何しろ、長寿だし。彼もまた不器用ながら印西で「愛」を叫び続け、その愛が各地のサイに伝わったのでしょう。



今 しかし……そんな大それたことができる元締めは、一体誰なんだい！
未来 そいつはな、昔から印西を仕切ってて、目が座ってて、脇に印鑑抱えて……。まるで借金取りだね……。どこの、誰なんだい？
未来 いんざーいく〜ん！！
今 いんザイ君が！
未来 「ピンクが似合うマスコットキャラ」百年連続第一位！
未来 彼に憧れて全国の動物園のサイがピンクになったくらいだ。

ピンクのサイは、元締めに。



「印度じゃないよ、印西市」をご存知でしょうか？「印度」と「印西」を間違えてやってきたインド人が印西で踊るムービー。それを発端に印西市はオリジナルカレーを作り、さらに市中にも新しいカレーを作る人たちも増えています。未来ではさらにカレー人気が定着し、もはやカレーを作るのは自然なこと。印西の山中に駆け回るイノシシも、その流れに乗せられたみたいです。

未来 彼をネゴシエーターにして、ついに動物達との友好条約も締結した。そこら中にいる、あのイノシシたちも？
今 彼らには、華麗なる仕事を委託した。
未来 華麗なる仕事って？
今 つまり、その……カレーになって貰った。
未来 カレーかよ！
未来 これが本当の、有効活用だ！

カレーづくりに拍車がかかる。

「木下安食ト杭本桒将監」。この地名になった理由は諸説ありますが、「きおろし・あじき・ぼっくい・もとの・しょうげん」不思議と耳触りのいい地名。同じ市内の人間でも読み間違えることがあるという難読地名も、また一つの個性。集まると、オリジナリティがより際立って感じられないでしょうか？

木下安食ト杭本桒将監



今 でもね！この印西市には中央って地名が多すぎるんだよ。
未来 千葉ニュータウン中央だろ、印西中央、印旛中央……。中央だらけで分かりにくいならありやしない。
今 大丈夫だよ、未来の印西の地名はなあ……。全部、「木下安食ト杭本桒将監」になった！ただでさえ難解な地名だったのに……。輪をかけてまあ……。

難読地名が個性になる。

交通網も、ダテじゃない。



リモートワークの拠点として注目されている印西市ですが、在宅が増えて、トランポリンが流行しています。ハイテンションで彼らが語るのは、もっと先の世界の新しいトランポリン。もはや MaaS など目じゃない、全てを越境する印西独自の交通スタイルが育っているようです。

今

それにしても随分繁盛してるなあ。

これじゃあ、今よりも渋滞がエグくなるんじゃないのかい？

464なんていつ曲がれるか分かったもんじゃない！

未来

渋滞なんてしないよ。国内ならば、トランポリン！

今

トランポリン？

未来

そう！××××みたいに広大な土地を使って、

巨大なトランポリンでホップ、ステップ、

ジャンプ！で、はい東京！

今

生身で飛ぶの!?!じゃあ、国外は？

未来

あの印西市のBIGな象徴！高速回転が可能になって、

時空を歪めてインドまで二秒！月まで八秒！

ビッグ！ホップ!! ステップ・ジャンプ!!!

とんでもない重力がかかってそうう……。

今

やっぱり、愛。

こんな未来の印西には、世界中どこから宇宙から観光客が集まってくるみたい。そんなお客さんを楽しませるのが、印西の「愛」!?! お粗末様でした。

今

行ったはいけれども、おい！

未来

どうやって帰ってくるの？この印西市まで……。

未来

終電が早いんだから……。

未来

終電？懐かしい響きだねえ。終電が早いおかげで、

未来

昔はよく、ど田舎珍獣扱いされたものだ。

未来

未来では、印西に住む珍獣に乗って帰ってくるのが当たり前。

未来

電車はもはやレア物。贅沢品だよ。

今

電車がレアものなら……じゃあ、誰も乗っていないのかい？

未来

ハート型の路線を巡る遊覧鉄道として、観光の名所になってるよ。

今

なんだってまたハート型なんかにしたんだい？

未来

印西の中には愛があるからな。印西をゆーっくり言ってみな。

今

インーザイ、インザアイ？、イン・ザ・アイ……!!

未来

そう！IN THE 愛!!!

今

お後がよろしいようで。

● Short Interview

私の「妄想落語」。

「言いたい放題、真面目にふざけました」
馬治さんとクリエイターが
制作を振り返る。

金原亭馬治

完成品ができたときは、2メートル離れて見ました(笑)。期待する反面、あまりに初めのことだから恐ろしいの何の！でも意外な反響や、身近な感想を聞いて、やっと自信をもって見れましたねえ。

最初は「名所案内みたいなもんだろ」と思っ
て打合せに行ったら、どうも全く未知の領域
でやべえ！ってなって(笑)。でもチームの皆
さんと話して、「よし、皆で妄想しまくろう！」
と腹を括った。落語って、普段は一人で演じ
切るものだから、協業は新鮮でしたね。

面白いんだけど、何がいいのか、コレ。素
朴なのがいいのかも。すごい労力がかかって
いるのに、どこかノンビリしてるでしよう
(笑)。印西らしさといえますか。

でも真面目に、ちゃんとふざけられたなと
思いますよ。皆で「悪ノリ」したわけだけど、

香取徹(ディレクター)

頭がバカバカ割れて、中身を覗いていくと、
どんな知らない自分が出てくる……そんな
イメージが湧いたんです、テーマが「妄想」と
決まってから。でも、皆の無意識が未来を知っ
てるっていうのは、あながち間違いでもない
かもしれないですね。

落語の語りは、聞く人の頭に映像が浮かん
でいくのが本来の魅力。今回はその映像自体
を作ってみたわけですが、馬治さんの普段の
落語も機会があれば映像にしてみたい。こち
らもまた違って、素敵ですから。

印西って山に囲まれているから、星がきれ
いなんですよね。僕個人の「印西妄想」は、そ
んな広大な土地が巨大なロボたちの憩いの場
になったらいいなあと。こないだ『シン・エヴァ
ンゲリオン』を見たからかも知れませんが
(笑)。今回、地元民として特にネタを出した
プロデューサーの山本大介さんにも聞いたと
ころ「僕は出し切りました！」とのこと(笑)。
でも今回は印西市民の声も多く反映されたの
が、よかったです。印西の作り手がさらに集
まったら、よりすぐる気がします！

金原亭馬治(左)

きんげんてい・うまじ

千葉県千葉市出身、印西を拠点に活動し
ている落語協会所属の真打。平成12年4
月、11代目金原亭馬生に入門。平成27年
3月、真打昇進。芸紋は「鬼鷲」。出囃子は
「どんどん節」。趣味は、俳句と競馬と釣り。

香取徹(中)

かとり・とおる

印西出身の映像ディレクターで、今回は
多用されたイラストも手がける。2018年
度から印西市PR動画を撮っている。右手
にしているのは、プロデューサー山本大介氏
(629 Inc.)。



インザいのじんざい。

色とりどりの
印西カルチャーをつむぐ、
オリジナルな「人材」を
連続インタビュー！

MIOのコアとなる「印西の色」は、
何色なのだろう？
コスモスピンク？ブルー？グリーン？
そうじゃない。
本当は、人の数だけ色があるはずだ。
少なくとも、地域ごとに
さまざまな個性に出会えるはず。

そんなわけで二〇二〇年、編集部は各地域で
個性を放つ人たちを独断で選び、
ZOOMによる連続インタビューを実施。
新興地域から旧地域まで、
高校生から五十代、そしてサイまで……。
各地の色濃い「人材」さんに
語っていただきました。

将監

木村智城さん
「木村食品」営業担当



本埜

山口颯大さん
専修大学松戸高等学校・
野球部所属



牧の原

栗林瑞穂さん
印西地区消防組合職員・
救急救命士



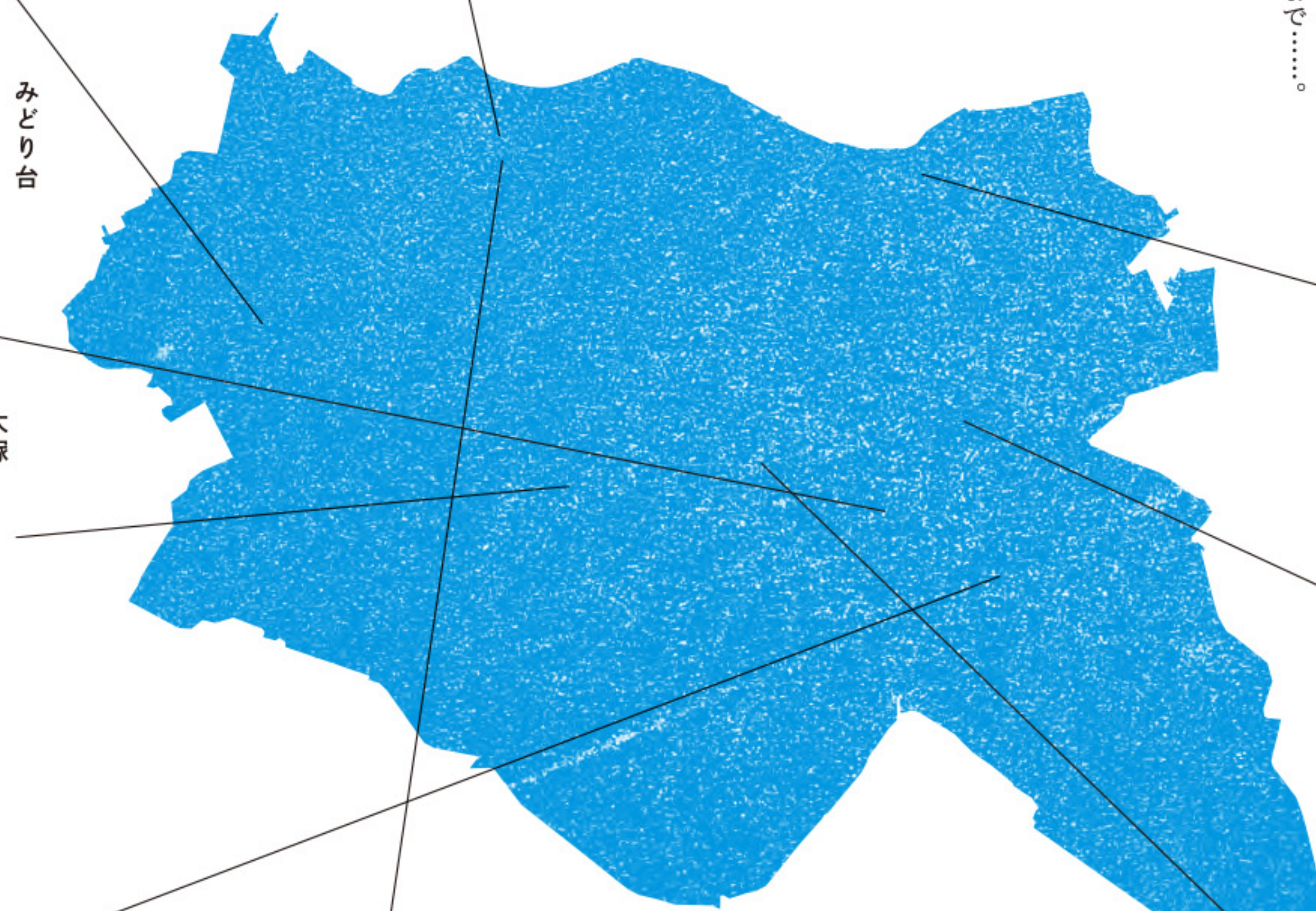
木下

大塚雄三さん
「酒乃なべだ」店主



木刈

伊賀崎俊さん
（一社）レプロ東京
代表理事兼監督



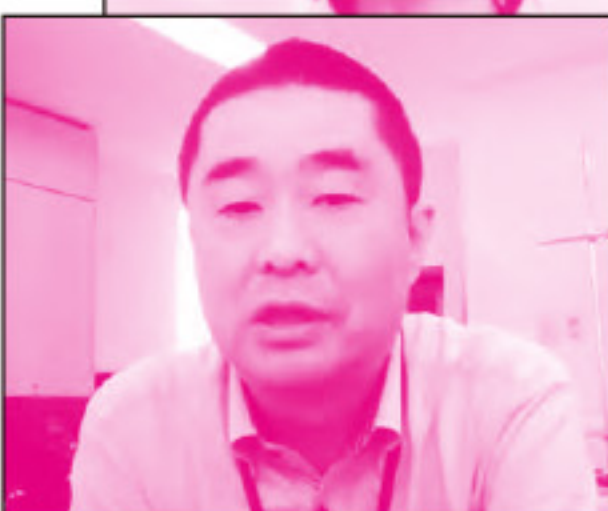
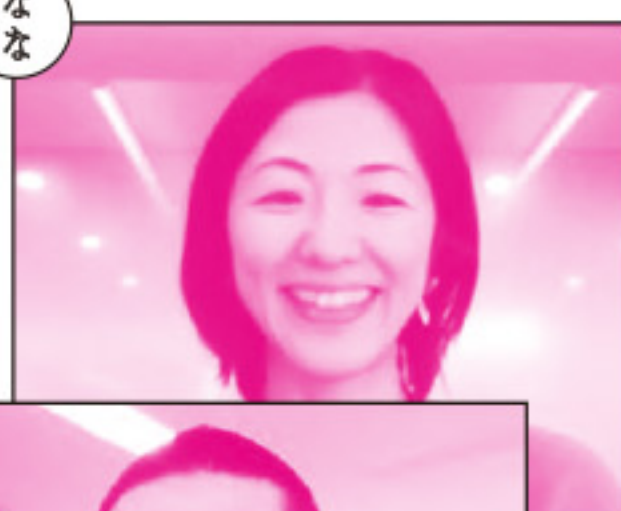
みどり台

加藤誠さん
北総鉄道・
技術部車両課所属



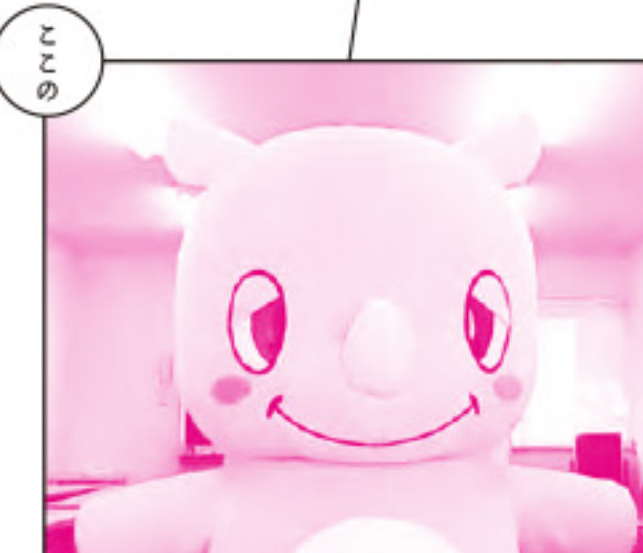
大塚

西田恵さん／宮田弘樹さん
竹中技術研究所



大森

いんザイ君
印西市
マスコットキャラクター



若萩

松岡歩さん
日本画家



「インザいのじんざい」
本編インタビューは
こちらをチェック！

「ジンザイ」は、自家製の「もち米」から切り餅やおかきなどの商品を生産・販売する「木村食品」の営業担当、木村さんです。こんがりとした焼けた姿は、毎日の稲刈り仕事の賜物。先祖代々続く農業も営みながら、高齢化の進む農家や田んぼを絶やさぬよう、日々奮闘中だそう。学生時代のラグビーの経験を活かし、アスリート向けの商品も開発したりと、アグレッシブな活動に今後注目！

元ラグビー選手の爽やかな営業マン。

もち米パワー

で印西を盛り上げる！



木村智城 さん
「木村食品」営業担当



栗林瑞穂 さん
印西地区消防組合職員・
救急救命士

“救急のメッカ”

印西で働きたかった

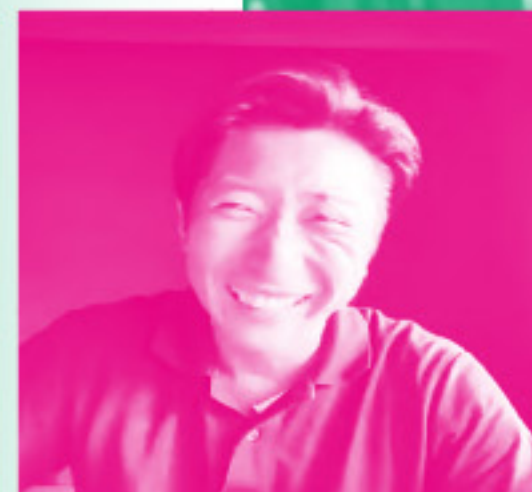
街の暮らしを守る、ボディビル女子。

つづいてのジンザイさんは、印西地区消防組合の消防署に勤務する栗林さん。普段は救急救命士でありながら、なんと裏の顔はボディビルダー。五年前よりトレーニングをはじめられ、今では大会に出場するなど、ビキニフィットネス競技（※）の選手としても活躍されています。「救急のメッカ」と呼ばれるほど、救急救命の世界では名の知れた印西で働くのが、かねてからの夢だったそう。フィットネス競技を続けながら街の暮らしを守る、スーパーウーマンです。

※筋肉やバランスの取れたプロポーションだけでなく、髪型からメイクまでトータルの“美”を追求する競技



大塚雄三 さん
「酒乃なべだな」店主



木下の街を、再び明るくしたい!!



「酒乃なべだな」
住所：千葉県印西市大森 4385

第一回の「ジンザイ」は、大正時代からこの地にある酒屋「なべだな」の当代・大塚さん。健康的な笑顔が印象的。大型スーパーが立ち並ぶ一方で、個人商店ならではのパワフルな取り組みは、地域で一際目立っており、歴史のある一方で高齢化のすすむ木下地域に活力を与えています。味わいある家屋に立ち並ぶのは「印西一」ともいえる豊富な品揃えの酒、酒、肴……。中でも印西のために作られた日本酒「利根政宗」は他では味わえない一級品。月に一度はこの店に行き、心を潤わせたいものです。

ポジティブパワーを絶やさない
“印西一”の酒屋！

印西から美術文化を発信する、
気鋭の日本画家。

四人目は、印西市若荻にアトリエを構える日本画家・松岡さん。東京藝術大学大学院修了後、百貨店や美術館、画廊での発表を行いながら、さまざまな美術展で数多くの賞を受賞。華やかな経歴のもと、精力的に活動が続けられています。「日本の原風景に近い景色をいつでもスケッチできるのは、印西暮らしの恩恵のひとつ」と松岡さん。普段は夜型の生活リズムで、ご近所付き合いも少ないことから周りの人に不審がられていないか不安……というのが最近の悩みのタネ。温厚なお人柄なので、印西市のみなさまどうぞご安心を！



印西市にある「印旗沼」の葦を描いたという、松岡さんの作品。建築家・隈研吾氏設計の「瑞聖寺」に模絵として奉納されています
Instagram: @matsuoka_ayumu より

松岡 歩 さん

日本画家

怪しいものではないんです。画家です。



北総鉄道を支える、緑の下の力持ち。

千葉ニュータウンと都心を結ぶ、印西市民のライフライン「北総鉄道」。その中枢を支える印西市の車両基地に勤務する、加藤誠さんは、印西に移住して二十五年。街も北総鉄道も発展途上の頃から印西の交通を支え、地域と共に歩んできました。現在は課長補佐という役割を全うしながら、「今後も安全第一に、地域密着型の運営を目指していきたい」と、力強いお言葉。北総鉄道の今後の発展が、ますます楽しみです。



加藤 誠 さん

北総鉄道・技術部車両課所属

安全第一！

街も人も、鉄道で繋いでいく



本塁に野球

の楽しさを伝えたい



山口颯大 さん

専修大学松戸高等学校・
野球部所属

地元を愛する若きスラッガー。

六人目は、今春センバツ(選抜高等学校野球大会)出場を果たした「専修大学松戸高校」三年生の山口颯大さん。毎日練習漬けのストイックな日々を送る山口さんの強みは、右打ちの力強いバッティング。チーム内でも期待の強打者、得点力の要を担っています。本塁地区で生まれ育った山口さんからは、人口が減りつつある街に「野球を広められるきっかけに自分がなれたら嬉しい」と地元愛溢れる一言が。目指すは、夏の甲子園！今後も目が離せません。



伊賀崎 俊 さん

証券会社勤務/
(一社)レプロ東京 代表理事兼監督

私が育ったのは、印西の
ゆったりした環境
のおかげ

■プロプレイヤーが語る印西の過ごしやすさ。

伊賀崎さんは、生まれつき耳が聞こえないのですが、デフサッカー(※)の元日本代表で、今は、聞こえる人と聞こえない人の混合サッカーチーム「レプロ東京」の代表。サッカーを通じ、音のない世界と音のある世界を繋ぐ取り組みが続いています。それだけでなく、人命救助をしたり、旅行記を執筆したり、講演を行ったりと、そのエネルギーは一体どこから?もしかして、出身地・印西から?長年を過ごした印西への思いをうかがいました。

※聴覚障害のある方が行うサッカー。Deaf:「聞こえない人、聞こえにくい人」の意。



いんザイ 君

印西市
マスコットキャラクター

インザイを
愛してください!

「人材」のフィナーレを飾るのは、「サイ」のいんザイ君。言わずと知れた印西市のマスコットですが、その正体はどうも曖昧なところが……。大森からやってきた謎の妖精「ジンザイさん」にも手伝わってもらって暴かれる、いんザイ君の考えていること。印西のこれからのキーとなる倫理性や社会性について、その中で果たすべき役目について。そして、何を食べたいか。知られざるサイの本音は、いかに!?

■あのピンクのサイが印西への愛を語る。

竹中工務店 技術研究所



宮田弘樹 さん

環境・社会研究部
地球環境グループ長



西田 恵 さん

環境・社会研究部
社会システムグループ所属

「多様性」と「一生高二」

■研究施設「調の森」から
個性派二人が見る夢は。

印西に集う先端施設の中でも先駆けといえる、竹中工務店の研究施設のお二人が登場。その鍵となるのは、印西ならではの自然環境の豊かさを生かし、さまざまな環境づくりを研究する「調の森」プロジェクト。人の健康を育む空間を考える「健康建築」プロジェクトを進める西田さんは、なんとオリジナルな「どぶろく」まで作ってしまった。そして研究所でも有数のキャリアを誇る宮田さんは、メインの仕事である「防虫」を切り口に、あまねく生態を俯瞰する壮大なヴィジョンを繰り広げる。二人の個性派研究者が、印西の先にみえる可能性とは?



竹中技術研究所による
「調の森 SHI-RA-BE®」では、
印西ならではの環境を生かした
実証実験などを行なっている。

ミステリーインインザイ

印西育ちの推理小説家が、
あまねく印西の「謎」を解く。

どの街もそうであるように、印西には「謎」がある。
不思議な伝承や、何だろう？と思う街角の痕跡、
知らぬ間に広がっている噂話……。
そんな「ミステリー」を、推理作家が読み解いたら、
きっと印西の新しい魅力が生まれるはず。
書き手は、この地に育った
本格ミステリーの新鋭・白井智之さん。
奇想天外な世界観と
精緻な推理劇に定評ある作家が連載した
市民の「謎」を読み解くエッセイを、
ここでは一挙収録します。
ごゆっくりお楽しみください。

執筆

白井智之

しらい・ともゆき

印西市出身の推理作家。

『人間の顔は食べづらい』(KADOKAWA)が

第34回横溝正史ミステリ大賞の最終候補作となり、同作でデビュー。

近刊に『名探偵のはらわた』(新潮社)、

『そして誰も死ななかった』(KADOKAWA)など。



印旛沼の龍の謎

印西市から原稿依頼を頂いた。市民から寄せられた「印西の謎」について自由に書いてほしいというのである。

もしミステリー小説に詳しい方がこれを読んでいたら、天下の印西市ともあろうものが不逞の輩に駄文を書かせるのはいかげなものかと思われるかもしれない。ぼくも同感である。ぼくは道徳も現実味もヘチマもない不謹慎で荒唐無稽な小説を書くことを生業としている。印西市の出身だと知れたら市の評判が下がること請け合いです。ぼくが思うに、印西市役所の担当者はあまり本を読んだことがないか、酒でも飲んで企画会議をやったかのどちらかだろう(これは一年前になぜかインド風カレーを売り出したことから何かわれる)。以下の文章に関する苦情は、ぼくではなく印西市のシティプロモーション課へお寄せ頂きたい。

さて第一回のテーマは印旛沼の龍伝説である。ぼくも小学校で教わった覚えがあるから、お住まいの方は当然ご存知と思う。現時点で寄せられた投稿を見ても、案の定、この伝承を挙げるものが多かった。

ある年、日照りが続き農民たちが困っていると、小龍が天に昇り雨を降らせた。だがそのことで大龍の怒りを買ひ、小龍は身体を三つに裂かれて地上へ落ちた。農民は小龍を供養し、頭の落ちたところに龍角寺、腹の落ちた

ところに龍腹寺、尻尾の落ちたところに龍尾寺を建てたという。

文献により細かな違いはあるが、おおむねこんな内容である。内田儀久『印旛沼の龍伝説』(印旛沼環境基金『印旛沼―自然と文化―』第6号より)では、この伝説について、法華経を浸透させ天台宗を普及させる狙いがあったのではないかと考察している。

ところで今回、資料を集める過程で、約三十年前、伝説にまつわる奇怪な事件が起きていたことを知った。学校の授業では扱わない題材なので、ここでぜひ紹介したい。

一九九二年、冬。ひどく残酷な方法で男性が殺される事件が起きた。男性の身体は三つに切断され、頭は龍角寺、胴は龍腹寺、腰より

下は龍尾寺の境内に置かれていた。死因は溺死。司法解剖の結果、肺から大量の微生物を含む泥水が抽出された。犯人は被害者を印旛沼に沈め殺害した後、遺体を三つに切り分け、三寺に置いて回ったものとみられる。

被害者は印沼龍太郎(仮名)。印西市内のシステム開発会社に勤めるエンジニアである。まさきに嫌疑をかけられたのが、印沼の同僚、横井領(仮名)だった。横井は領収書を偽造し経費の架空請求を繰り返していた。あるとき印沼にそのことがばれ、金銭を強請られていたのである。

だが横井にはアリバイがあった。遺体の腐り具合から印沼が死亡したと推定される期間、彼は滋賀県大津市へ出張していたのだ。

ここで真相を明かすと、犯人はやはり横井であった。この男は大津にいながら、どうやって印沼を殺害したのか。皆様はお分かりになるだろうか。

何のことはない。横井は印沼を殴打して昏睡させると、スーツケースに入れて大津へ運び、琵琶湖に沈めて殺害したのである。「龍伝説」といえば印旛沼」という思い込みを利用し、遺体を三つの寺に並べることで、彼が印旛沼で殺害されたものと誤認させたのだ。

横井のアリバイ工作はあっさり瓦解した。肺の中から印旛沼に生息していない珪藻が見つかったのだ。横井は無期懲役の判決を受け、現在も千葉刑務所に服役している。

というのはもちろん真つ赤な嘘つばば、暇な作家の妄言である。念のため繰り返すと、苦情はシティプロモーション課までどうぞ。

カハポタルの謎

腸が煮えくり返っている。詐欺に遭ったのだ。

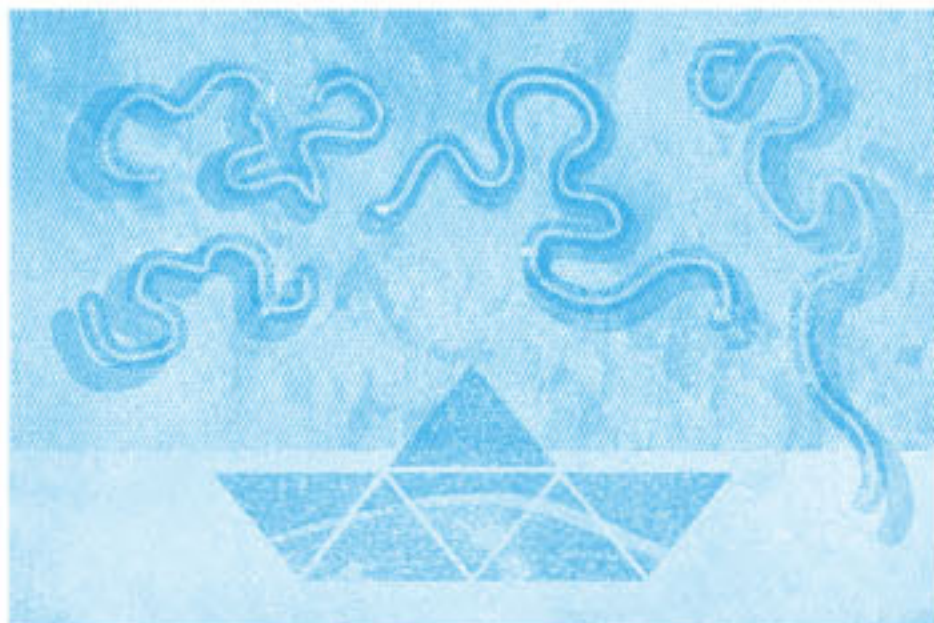
ぼくの貯金を掠め取ったのは全国に拠点を持つ巨大犯罪組織である。彼らはサラリーマンの給料や零細小説家の原稿料からゼーキンと称する上納金をピンハネし、甘い汁を吸っている悪逆無道のならず者集団である。聞くところによると、全国各地に存在する関連組織の中でもインザイシという連中はたらふく金を稼いでいるらしい。シマが特別広いわけでもないし、優れたシノギがあるわけでもない。これぞ最大のミステリーである。だが地方行政の闇を暴いて原稿料を削られたら骨折り損なのでそろそろ本題に入る。

江戸末期の医師、赤松宗旦が著した「利根川図志」に、印旛沼の怪火に関する記載がある——そんな投稿が届いた。

この怪火はカハポタルと呼ばれる。同書から特徴を抜粋すると、「形は丸くて、大きさは蹴鞠のようで、その光は、螢火の色に似ている」「水の上を、一、二尺離れて、いくつも飛びまわる様は、あたかも水上をフラフラ歩いているよう」「長雨の時には、特に、夜な夜な無数にあらわれる」「(触れた箇所は)例えようのないほどなまぐさい臭いがした。それは、まるで油のようでもあり、膠のようでもあった」という代物である(審書房「口訳利根川図志巻4」より)。

蹴鞠サイズの火の玉がユラユラ飛び回って

いたら確かに不気味である。だがぼくが好むのは「落ち武者の祟りで村人が皆殺し」みたいな話であって、この手の生ぬるい怪異譚にはあまり興味が無い。酔っ払いが夢でも見たんじゃないの? というのが素直な感想だが、ここはひとつ脳味噌を引っ張り返して、カハポタルの正体を探ってみる。



① 蜚説

なにせ名前がカハポタルだ。目の悪い年寄りが蜚を見て、火の玉と思い込んだのではないか。——いや、さすがにこれでは面白くない。

「サントの正体はお父さん」と同じ次元だ。もう少し脳味噌を捏ねてみる。

② 船灯説

かつて印旛沼は漁業が盛んだったという。やはり目の悪い年寄りが、船の灯りを火の玉と見違えたのではないか。——これも蜚と五十歩百歩だ。「週刊誌の人妻投稿欄」を書いているのはおっさん「くらい驚きがない」。

③ 子どものしつけ説

カハポタルは夜現れるという。夜の水辺は危険が多い。親が子を寝かしつけるのに「早く寝ないとおばけに攫われるよ」と囁くように、沼から遠ざけるために「カハポタルに襲われるよ」と法螺を吹いたのではないか。——だが子どもを怯えさせるのが狙いなら、悪臭が付く、というのは地味すぎる。沼へ引き摺り込むくらいしてほしいものだ。

④ 財宝説

かつて印旛沼付近の百姓たちは、沼の底に財宝を隠していた。舟遊びにきた余所者が、小判でも釣り上げたら一大事である。そこで無暗に沼へ近寄らぬよう、ひどい臭いのする火の玉が飛び回っていると嘘を吐いた。——これは夢のある仮説だ。だが大切な財宝を沼に沈めるか、という少々疑問が残る。ならば。

⑤ 死体説

そう来なければ始まらない。江戸時代、貧しい百姓の中には、旅人や巡礼僧を襲い、路銀を奪う者があったという。印旛

たのだろう。

八月二十一日、早朝。ふたたびO沢から着信。「すっかり良くなった。やっぱり行こうか」いつもの猥雑な口調に戻っている。やはり演技だったか。

同日、二十二時過ぎ。木下駅でO沢と待ち合わせ。手配しておいたタクシーで市井橋へ向かう。

移動中、スマホに着信。電話に出ても何も聞えない。気味が悪いが、いたずら電話か。

二十二時三十分、市井橋に到着。

橋の上は湿っぽい風が吹いていた。となりの山田橋にはちらほらと車が走っているが、市井橋にはまったく人気がない。耳を澄ますと、虫の鳴き声、葉の擦れる音、それに川のせせらぎが微かに聞こえる。残念ながら泣き声は聞えない。

「無駄足でしたわ」

ぼくがO沢に皮肉を言ったそのとき、タイヤが土を踏む音が聞こえた。西側の橋の袂に軽トラが停まり、運転席から七十過ぎの男性が首を出す。

「お前、橋に呼ばれたのか」

老爺が言った。乾燥したソラマメみたいに顔色が悪い。

「どういふことです?」

ぼくが質問を返すと、老爺は小さく息を呑み、声を硬くした。

「お前は橋に招かれたんだ。もう帰るなさい」

それだけ言うと、老爺は運転席へ戻り、軽トラで道を引き返した。

「何だったの?」

「さあ」

沼付近の百姓たちも、旅人を殺し、死体を沼に隠していたのだ。彼らが何より怖れたのは、偶然浮き上がった死体を余所者が見つけてしまうことだった。そこで人が近寄らぬよう、カハポタルの噂を流したのである。

この仮説なら、カハポタルの悪臭にも説明がつく。その正体は、死臭だ。

悲しいかな、今は印旛沼の怪火を信じる者はいない。だが怪異が忘れられても、由来となった風習が途絶えたとは限らない。期せずして冒頭に述べた「最大のミステリー」を解いてしまったようだが、連載が打ち切られたら面倒なので筆を置くことにする。

市井橋の謎

まず投稿を二つ紹介する。

「夜、市井橋を渡ると、嘔り泣くような声が聞こえます。近くにお住まいの方によると、年に数人、橋から飛び降りて亡くなる方がいるそうです。(中略)仕事にも家族にも恵まれ、自殺するとは思えないような方ばかり亡くなっているそうです。」

「なぜか遠くからやってきて、市井橋で入水自殺をする人がある。高齢者の中には、橋に呼ばれたのだ、と言う人もいる。」

市井橋は印旛捷水路に掛かる橋の一つだ。

印西市在住の方は、県道65号の山田橋から見える赤いアーチ橋と言えは分かりになるだろうか。

初めに断っておくと、ぼくは幽霊を信じていない。伽椰子も貞子もサマラも好きだが、彼らの仲間と出会ったことはない。「わたし、見えるんです」などと言われると、変な数珠でも売られるのかと身構えてしまう。

そんなわけで、ずいぶんと法螺を吹いてやがるな、というのが二つの投稿を読んだ感想だった。と同時に、嫌な予感がしたのである。この連載を担当するO沢という編集者は、誰彼かまわず十五番煎じの怪談話を披露して人を呆れさせるタイプのホラー好きのおっさんで、案の定、「突撃取材をやりたい」と言い出した。

どうせ何も起こらない心霊スポットへ、おっさんと二人で出かけるのは気が進まなかったが、O沢が「幽霊の泣き声が聞きたい」と譲らないので、やむなく第三回のテーマに取り上げた次第である。

はたして幽霊の鼻吸りを聞くことはできたのか? 以下に一部始終を記す。

八月十四日。前述の通り、編集者O沢のわがままで、二十一日に市井橋を訪ねることが決定。

八月二十日。O沢から着信。「ごめん。明日の予定、延期させて。風邪こじらせちゃってさ」大げさなほど声が震えている。「市井橋に行くって決めてから、肩が重いんだよね」

——白状すると、ぼくはO沢を疑っていた。せつかく心霊スポットを訪ねるのに、ぼくが平然としているから、怖がらせようと芝居を打っ

ぼくとO沢は揃って肩をすくめた。その後も十分ほど橋の上をうろついたが、幽霊の泣き声とやらの聞くことはなく、ぼくらは印西市の原駅前ビジネスホテルに一泊して印西市を後にした。

以上が突撃取材の顛末である。奇妙な老人と出会ったほかに、釣果はなし。老人もO沢が仕込んだ役者かもしれないが、野暮なので質していない。ホラー映画なら退屈すぎて苦情が来るところだが、現実の心霊スポット突撃記はこんなものである。

——と、当時は思っていたのだが、それは勘違いだった。八月二十二日、市井橋を訪ねた翌日の夜、O沢からふたたび着信があったのだ。「昨夜も電話したんだけど、つながんなくて一日休んだらすっかり良くなったよ」

彼は普段通りの荒っぽい口調で続けた。

「突撃取材、何日にする？」



に出入りしたのか。読者の皆様はすでにお気づきだろうか。まだ分からないという方は、もう一度、頭からこの記事をよく読んでみてほしい。

タネを明かすと、現場の展示室には抜け道があった。

この資料館は消防署を改装したものである。かつての消防署には、隊員が素早く消防車に乗り込むため、上階と一階をつなぐ滑り棒が設置されていた。この建物の二階の床にも、棒を通すための直径二メートルほどの穴が空いていたのだ。

この穴は改装工事で塞がれたことになっていたが、実際は予算が足りず、板で覆われただけだった。それを知っていた犯人は、乙骨を自殺に見せかけるため、板を持ち上げて穴から逃走したのである。

では犯人はどちらか。宮城県在住の臓野は、かつてこの施設が消防署だったことを知らない。一方、開館当時から勤務していた肉倉は、当然それを知っていた。よって犯人は肉倉である。

展示室の床板から指紋が検出されるに至り、肉倉は容疑を認めた。勤務中の態度を巡って言い争いになり、かっとなって乙骨を刺してしまったという。

これが事件の顛末である。空前絶後のトリック

推理小説好きが愛してやまない不可能犯罪の一つに密室殺人がある。出入りのできない部屋で人が殺される。犯人はどうやって犯行を成し遂げたのか。何のためにそれを行ったのか。推理小説の始祖「モルグ街の殺人」から連綿と書き継がれてきたテーマであり、今後も新たな創作を生み続けるであろうミステリーの花形である。

そんな密室殺人だが、大変残念なことに、現実で出会うことはめったにない。たまにネットニュースの見出しで密室殺人という文字を目にしても、蓋を開けると「犯人が鍵を持っていた」という謎もへったくれもないグルーポンのおせちみたいな代物ばかりでため息を吐きたくなる。だが現実も捨てたものではない。治安が良さそうなのによく陰惨な事件が起きることでお馴染みの印西市で、わずか十年前、奇怪な密室殺人が発生していたのである。

ここでようやく今回の投稿を紹介する。

「何人もの人を切り刻んだメスや手術台、あの時代の医科器械が陳列された謎の館。印西市のミステリースポットと言えばここ。その名は『印旛医科器械歴史資料館』」

何が言いたいのがよく分からない文章だが（ミステリーっぽいことを言おうとしたのは分かる）、この印旛医科器械歴史資料館は実在の

施設である。印西市にお住まいの方は日本医科大学千葉北総病院の近くの焦げ茶色の建物と言えピンと来るだろうか。長く暮らしている方なら改装前に消防署だった頃の姿を覚えているかもしれない。つやつやしたニュータウンの街並みと比べると幾分古めかしい佇まいだが、実は歴史的価値の高い医科器械を多く収蔵する世界にも類のない施設なのだという。

この資料館を紹介するにあたり、ぼくは同館を取り上げた雑誌や新聞の記事に目を通した。そして図らずも、現実を舞台にした密室殺人に辿り着いたのである。

二〇一〇年、夏。印旛医科器械歴史資料館の二階の展示室で、職員乙骨舞姫（仮名）が血を流して倒れているのが見つかった。展示品の鉗子で肺と肝臓と心臓を刺されており、搬送先の病院で数時間後に死亡した。

乙骨が倒れていた展示室には扉が二つあったが、いずれも内側から施錠されていた。自殺の可能性も検討されたが、傷が多いこと、そして刃物を払いのけようとした際にできる手の引っ掻き傷——いわゆる防衛創が残っていたことから、他殺と断定された。警察は小説さながらの不可能犯罪に直面したのである。

乙骨が襲われたとみられる時間帯、資料館には二人の人物がいた。一人は肉倉育夫（仮名）、六十五歳。資料館の開館時から勤務するベテラン職員で、乙骨の同僚でもある。もう一人は臓野麻也（仮名）、二十一歳。宮城県在住の医学生で、東京観光のついでに資料館へ足を運んだという。

どちらが乙骨を殺したのか。どうやって現場

クというには心許ないが、現実にしては上出来だろう。なぜ大きな話題にならなかったのかと疑問に思った方は、一つ深呼吸をして、第一回の記事の末尾を読み返してほしい。あしからず。



気づけば連載も五回目。今回は番外編をお届けする。

印西市民および関係の深い方から市にまつわる「謎」を投稿して頂き、ぼくがそこから面白いものを選んでいい加減な推理や解釈を披露する、というのがこの連載の要旨である。当初はこんな訳の分からない企画に投稿が集まるのかと心配だったが、ありがたいことに期待以上の数の投稿が集まった。さすがは「住みよさランキング」(東洋経済新報社)総合評価一位から二年で三十二位に暴落した印西市である。

寄せられた投稿には「龍の尻が降ってきた」「火の玉が浮いた」「自殺が相次いでいる」といったスケールの大きな謎もあれば、日常生活の中でふと疑問に感じるような小さな謎もあった。今回はそんな小さな謎をいくつか選んで紹介したい。

① 学校を飛び越える少年

千葉電ヶ崎線の船穂小学校付近に一風変わった道路標識があります。学校があることを示す標識といえば、子ども二人が揃って歩く図柄が多いですが、これはアスリートを彷彿とさせる跳躍力で学校(SCHOOL)を飛び越えています。標識がかすれ柱が錆びていることから相当古いことが想像できますが、なぜ、この一枚だけ残ったのか。付近には駐在所もあるから、警察官の趣味が関係するのだろうか。



旧式の道路標識について調べてみると、このデザインは昭和二十五年(一九五〇年)三月の道路標識令改正で採用され、昭和三十五年(一九六〇年)十二月に変更されるまで用いられたものだといわれる。

G H Q 占領期に制定されたこともあり、当時のデザインには日本語、英語、イラストを併用したものが多い。限られたスペースに多くの文字を配置すれば、それだけイラストの形状も制限される。そんな制限の中で生み出されたのが、両脚を大きく開いた少年のイラストだった

入づてに近隣住民の方にも話を聞いてみた

が、名称の縁起は分からなかった。平将門伝説を由来とする向きもあるようだが真偽は定かでない。いずれにせよ「この踏切は頭割踏切という名前にしよう」と決めた鉄道職員がいたはずで、ただデリカシーがなかったのか、わざと悪趣味な名前を付けたのが気になるところ。



③ 印旛沼の怪鳥

「印旛沼で見たこともないほど大きな鳥が飛んでいるのを見ました。ただ、お酒を飲んでいたので、本物か幻覚か分からずもやもやしています。」

近くにお住まいの方はご存知と思うが、印旛沼には一羽のモイロペリカンが暮らしている。この種は日本には生息しておらず、なぜ印

旛沼に現れたのかは不明だという。

十中八九、投稿者の方が見たのはこれだろう。もつとでかかったという場合はご一報ください。

④ 地下道から響く声

「木下駅の地下道で、夜中に誰もいないのに声が聞こえることがあります。」

ぼくは大人なので、物音だけで幽霊を信じるほど素直ではない。「幽霊の正体見たり枯れ尾花」というやつで、足音か風の抜ける音を声と聞き違えたのだろう。もしその声に話しかけられたらご一報を。

⑤ 斎場の女

怪談じみた話が増えてきたが、最後に極めつけのものを紹介する。印西市で働いていた元タクシー運転手の方からの投稿である。

「深夜十二時を過ぎているにも関わらず、斎場に無線配車。思わず配車係に「人間ですか?」と尋ねると「人間だ」と思うよ。女性の声だったから」との返事。

正門だつて閉まっているのに客がいるわけがない。「キャンセルしたいのですが」「だめだよ。受けちゃったから」「どうしても行きたくないのですが」「どうしても行ってくれ」そんなやりとりの末に斎場へ向かうと、女性が立っていた。

ドアを開けると、女性が乗り込んできて木下の旅館の名を告げた。こんな時間に斎場な「何かあったんですか?」



のではない。少なくとも近所のお巡りさんの趣味ではなさそうなのでご安心を。

② 頭を割る踏切

「JR成田線の木下駅、小林駅間、木下東と竹袋の境界付近の踏切が「頭割踏切」と名付けられている。なぜこんな怖い名前なのか。」



なんて?」と聞いてみると、「九十歳を過ぎた祖父が亡くなり、親戚が通夜の席で酒盛りをしていて、寝る場所がなくなってしまった」とのこと。私は思わず大笑いしました。以上つまらない話でした。」

来年の「住みよさランキング」も暴落が続きそう。引き続き投稿をお待ちしています。

ひ

松虫姫伝説の謎 前編

印西市民は昔話が好きなのか、現実が退屈すぎるのか知らないが、第一回目で取り上げた龍伝説に次いで投稿が多かったのが、松虫姫の伝説だった。

奈良時代、病に臥せった松虫姫(聖武天皇の第三皇女)が、夢のお告げを信じて萩原の里(現在の印西市松虫)の薬師堂を訪ね、病を治したというのが大まかな粗筋である。詳しく紹介するとそれだけで原稿が埋まってしまいうから、松虫寺のホームページに掲載されている伝承の説明をこ一読頂きたい。

月へ帰ったかぐや姫や天の川に恋を引き裂かれた織姫と比べるとさすがに小ぢんまりした話だが、山賊や大蛇との闘いは冒険活劇のようだし、悲しい後日談も胸に残る。

松虫寺ではこれまで、松虫姫伝説を漫画化したりノベライズしたりと、様々な形で伝承の世界を表現してきた。ここは一つ、推理作家の端くれとして、この伝承の謎に挑んでみ

たい。もし松虫姫伝説が実話だったら、一連の超常的な現象を合理的に説明することはできるのか？ そんな思考実験をやってみようというわけである。松虫寺の縁起にけちを付けるようで些か罰当たりだが、こんな企画を了承した印西市の責任ということでご容赦願いたい。

初めに、この伝承の謎、つまり不可解な点を整理してみる。謎は二つある。

一つ目は、言うまでもなく、不治と思われた病気がなぜ治癒したのかという謎である。薬師如来のご利益と言ってしまうればそれまでだが、現実の病気は神頼みでは治らない。

二つ目は、なぜ牛が自ら命を絶ったのかという謎である。姫との別れを知った老牛は、ひどく悲しみ、自ら池に身を投じた。鶴が機を織るとか熊が相撲を取るといのは昔話では定番だが、現実にはそんな動物はいない。仮にこの伝承が薬師如来のありがたみを説く寓話だったとしても、牛が池に身を投げる理由がよく分からない。

他にも印旛沼に地面が浮かんだとか杖の木が根付いたとかいう荒唐無稽な話が出てくるが、これらは物語を壮大に感じさせる一種の演出だろうから、ここでは脇にのけておく。

ぼくは手始めに、松虫姫が患った病気を調べてみることにした。この病気が平城京の気候や生活に起因していたとすれば、下総へ旅に出たことで、自然と症状が治まった可能性はあるからだ。

『利根川図志』(赤松宗旦著、柳田国男校訂／

岩波文庫)を紐解くと、『松蟲皇女廟』という項に短い記述がある。ここでは姫の罹った病としてハンセン病を示す言葉が使われているが、日本で大風子油によるハンセン病の治療が行われたのは江戸時代以降のこと。当時の下総に未知の治療法があったと考えるのは無理がある。

『房総の不思議な話、珍しい話』(大衆文学研究会千葉支部／尚書房)では、天平時代に流行した史実から、姫が天然痘に罹っていた可能性が指摘されている。だが天然痘ワクチンが開発されるのは十八世紀であり、抗ウイルス薬は現在も存在していない。やはり下総へ来たところで症状が改善するとは思えない。

ぼくは頭を抱えた。そもそも推理作家というのには謎をつくる仕事であり、謎を解く仕事ではない。ましてや一三〇〇年前の伝承の謎を解明するというのは荷が重過ぎる。いつも通り、印西市の窓口でも書いてお茶を濁そうと決めた、そのとき――

ぼくはふと、松虫姫伝説に登場したある人物の行動に疑問を持った。その人物に注目して資料を読み返すと、瞬く間に二つの謎が解けてしまったのである。

△後編に続く▽

なな

松虫姫伝説の謎 後編

ここからいよいよ松虫姫伝説の謎を解いていきたい。少々ややこしい話になるので、改めて松虫寺のWikipediaサイトに掲載された伝承を読んでから先へ進んで頂ければと思う。

前編で述べたように、ぼくは松虫姫伝説に登場したある人物の行動に疑問を持った。その人物とは松虫姫の乳母、杉目である。

彼女はなぜ、萩原の里に残ったのだろうか？ 「私ももう寄る年波、身体が弱って都まで帰れそうにありません」というのが杉目の主張である。人より寿命の短い牛が老い暮れてしまっ

たのは良いとしても、人が短期間でそれほど老け込むものだろうか。

この物語――松虫姫の一行が奈良の都を発ってから、萩原の里で病が治癒するまで――の中で経過した時間を推測してみる。平城京から松虫寺までは直線距離で四二〇キロ、歩行距離は五二〇キロほどだから、仮に一日四時間、時速五キロで歩いたとしても、二十一日で到着する計算になる。山賊や大蛇との闘いで消費した時間を鑑みても、四十日もあれば十分だろう。そこから姫が薬師如来に祈りを捧げ、病が治癒するまで二十一日。合計しても、たった二カ月ほどの出来事なのである。もちろん「寄る年波」というのは言葉の綾で、長旅の疲れで氣力を失っていたという可能性もある。だが姫が祈りを捧げている間、杉目は里の人々に文字の読み書きや養蚕の方法を教えていた。息の弱った様子は全くない。

往路で山賊や大蛇が現れたように、復路もどんな危険が待ち受けているか分からない。人手は多い方が良いはずだ。杉目はなぜ、姫と都に戻ることを拒んだのだろうか。

この問いに答える仮説は一つしかない。全ては杉目の策略だったのである。

杉目は萩原の地に生まれた。奈良の都へ移り住んだ理由は分からないが、貴人に見初められ、半ば強制的に連れ去られたのかもしれない。

やがて年を重ねた杉目は、命が尽きる前に萩原の里へ戻り、家族と再会したいと願った。だが理由もなく乳母の責務を投げ出すことは許されない。そこで杉目は大胆な策を弄した。

世話をしていた松虫姫の食事に毒を盛ったのである。

松虫姫の体調は徐々に悪化していった。僧医や祈禱師が手を尽くしても症状は治まらない。そんなとき、杉目は松虫姫に萩原の薬師如来の故事を吹き込んだ。いつの時代も心の弱った人間ほど騙されやすいものはない。ましてや十四歳の少女である。松虫姫は暗示に掛かり、何でもない夢を薬師如来のお告げと思い込んでしまった。

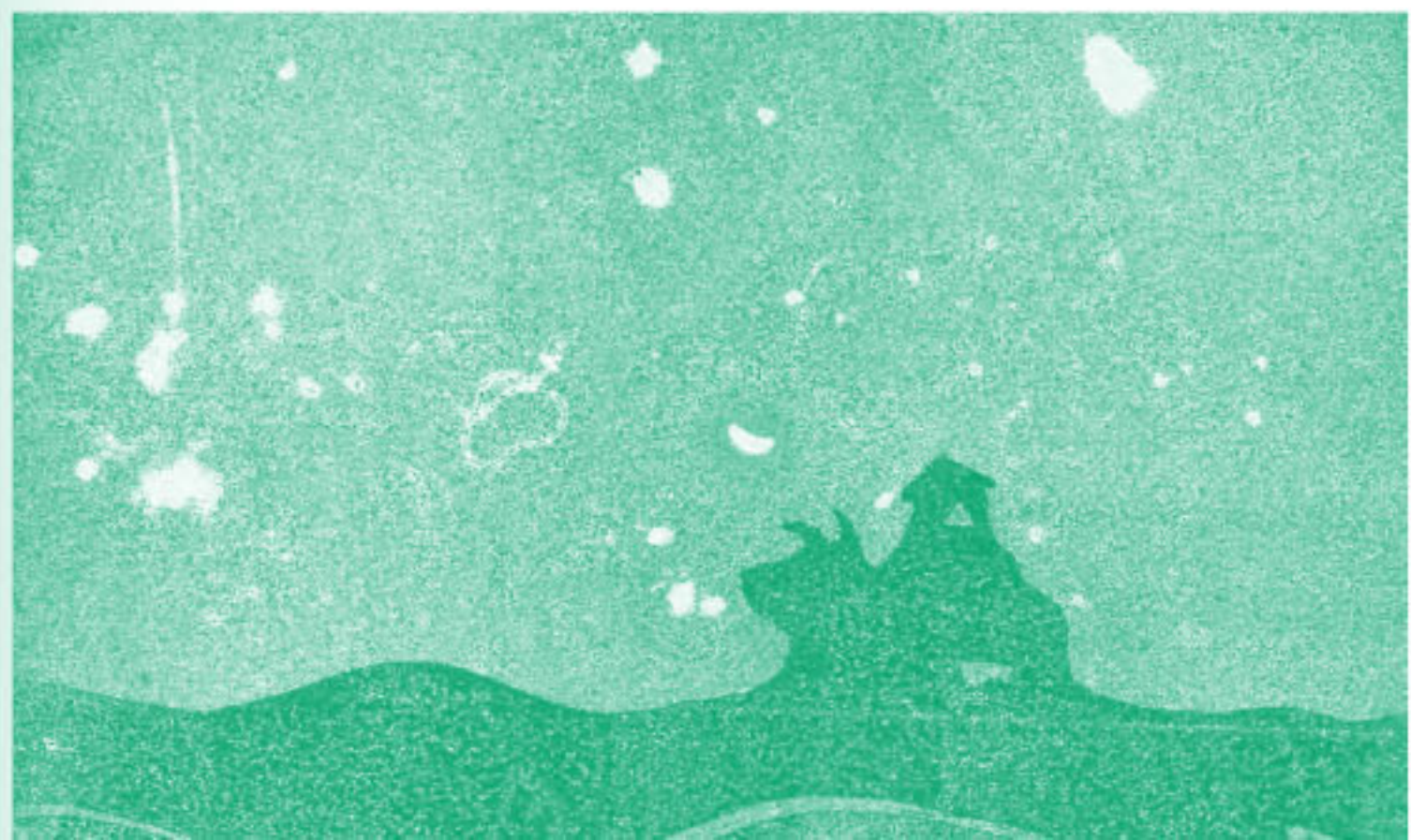
聖武天皇は松虫姫の言葉を信じ、警備の武士や乳母の杉目を連れて萩原の里へ向かわせた。杉目は律令を破ることなく、遠く離れた故郷へ旅立ったのである。

やがて一行は萩原の里へ到着した。もう松虫姫の身体を弱らせる必要はない。杉目は食事に毒を盛るのをやめた。松虫姫の体調が良くなったように見えたのはそのためだ。

杉目には最後の仕事が残っていた。皇女に毒を盛ったことがばれたら命はない。杉目は絶対に見つからない方法で毒を捨てなければならなかった。そこで残った毒を牛に飲ませ、死体が見つからないように重りを付けて池に沈めたのである。

杉目が家族と再会できたのかは分からない。だが彼女を知る友人は里に残っていたはずだ。幼馴染みたちの暮らしを支えるため、杉目は文字の読み書きや養蚕の方法を教えた。都への帰還を拒んだのも当然だろう。

松虫姫伝説は、萩原の薬師堂を訪ね病を治した美しい姫の物語とされている。だがその正体は、知恵を尽くして故郷への帰還を果たした老女の物語だったのである。





イを持ちながら、いかに阿久田を殺したのか。ここから先は、謎が解けた方のみ読み進めてほしい。

アリバイの謎を解く鍵は、被害者のTシャツに付着していた黒胡椒である。警察は当初、この黒胡椒は犯人と被害者が揉み合いになった際に犯人のカットソーから移ったものと考えていた。だが事件は八月である。二人が揉み合いになったのなら、被害者の衣服に汗や化粧などの痕跡が残らなければおかしい。黒胡椒がシャツに付いたのは他に理由があったのだ。

前述の通り、この黒胡椒は居酒屋〈山の宴〉の店長がカンボジアから輸入したものである。この店を訪れない限り、同じ黒胡椒が服に付くことはない。五味が酒を飲んでいたとき、阿久田もこの店を訪れていたのだ。

五味は煙草を吸おうと店の外に出て、店に入ろうとしていた阿久田と鉢合わせた。酒に酔っていたこともあり、五味は突如現れた怨敵を殴り殺してしまう。ふと我に返った五味は、遺体を店の外のゴミ置き場に隠し、何食わぬ顔で席へ戻った。阿久田のTシャツに黒胡椒が付いたのはこのときである。

宴会がお開きになると、五味は友人と別れてから、一人で〈山の宴〉へ引き返した。そしてゴミ置き場の遺体を自動車に載せ、阿久田のマンションへ運んだのである。彼女にアリバイをもたらしたのは幸運と機転だったのだ。

なお念のため付け加えておくと、五味がアリバイ作りのために共同溝の空気輸送システム

ムを使った可能性はない。この事件が起きたのは二〇一一年の夏だから、二〇一一年三月に運用が中止された仕組みをトリックに用いるのは不可能である。犯人は空気輸送管を使って移動したのではないか、などとお考えになった素直な方は、くれぐれも還付金詐欺の類に引っかけられないようご注意ください。



千葉ニュータウン中央駅の北口のロータリーに謎のキューブがあります。高さは四メートルはありそうで、夜になると不気味に発光します。オブジェのようですが、扉が付いているので中に何かありそうです。

まずは投稿を紹介する。

共同溝の謎

(伊西市シテイプロモーション課担当者より) 違います。

ここで筆を置いても良いのだが、松虫姫の物語にはさらに後日談がある。病は治ったものの、姫は若くして世を去ったという。ぼくにはそれが自然死とは思えない。姫は一度、薬師如来のご利益で快復したように見えたが、結局、毒害の後遺症で命を落としたのではなか。い。

とどのつまり、松虫姫は移住に殺されたのである。

投稿者の方の言う「謎のキューブ」とはこれ(左上写真)のことだろう。

近くにお住まいの方は見慣れているだろうが、言われてみるとぶつ壊れたゲームのような味わいがある。

投稿者の方の疑問に答えると、このオブジェは地下に張り巡らされた共同溝の入り口だという。千葉ニュータウン中央駅の周辺の地下には上下水道管、電力・電話・有線テレビケーブル、冷暖房用配管などが収容された共同溝があり、街の景観の保持やインフラの安定供給に役買っているのだとか。

ちなみに共同溝の中には廃棄物空気輸送管なるものがあり、かつてはゴミを投入口に捨てるだけで空気流が勝手に印西クリーンセンターまで運んでくれるという廃棄物空気輸送システムが運用されていた。だがゴミの分別が難しいことや収容量が伸び悩んだことなどから、二〇一一年三月に運用が中止されたという。

さて例によって共同溝に関する新聞記事を調べていくと、かつては廃棄物空気輸送システムが導入されていた地区で、面白い事件が起きていたことが分かった。ここからは気分を変えて、推理クイズを解くような気分で見進めて頂きたい。テーマはアリバイ崩しである。

二〇一一年、夏。印西クリーンセンターから六百メートルほど離れたマンションの一室で、男性が頭を殴られ死んでいるのが見つかった。殺されたのはフリーペーパー制作会社に勤める阿久田龍一(仮名)。死亡推定時刻は前

日の午後八時から十一時にかけて。遺体はTシャツにデニムパンツというラフな格好だったが、Tシャツの胸元に黒い粉末が付着していた。

警察が阿久田の交友関係を洗うと、すぐに有力な容疑者が浮上した。阿久田のかつての交際相手で、フリーターの五味さと子(仮名)である。阿久田の浮気がきっかけで交際が破局して以降、五味はたびたび「あの男に騙された」「人生をめちゃくちゃにされた」「殺してやりたい」と洩らしていた。

捜査を進めると、阿久田が殺された日の夜、五味は印西市内の居酒屋〈山の宴〉で友人と酒を飲んでたことが明らかにされた。さらに阿久田のTシャツに付着していた黒い粉末が、〈山の宴〉の店長がカンボジアから輸入した黒胡椒であることが判明するに至り、五味への疑いは決定的になった。五味は〈山の宴〉で酒を飲んだ後、阿久田のマンションを訪ね、彼を殺害した。このとき揉み合いになったため、五味のカットソーに付いていた黒胡椒が被害者のTシャツに移ったのだろう。

一方で、五味にはアリバイがあった。〈山の宴〉で一緒だった友人によると、阿久田が死亡したとみられる午後八時から十一時にかけて、五味はひたすら店内で酒を飲み続けていたという。煙草や小用のため何度か席を外したものの、時間はせいぜい十分程度。〈山の宴〉から阿久田の自宅までは徒歩二十分ほどの距離があり、どれだけ急いでも十分で阿久田を殺して店に戻ることはできない。

結論を明かせば、阿久田龍一を殺したのはこの五味さと子である。彼女は誰かなアリバ

印旛飛行場の謎

かつて草深に存在した飛行場について、複数の方から投稿を頂いた。

「地元の古老に聞いた話。戦争が終わり、印旛飛行場が撤去されてしばらく後、夜になると、かつて配備されていた戦闘機のエンジン音と同じような音が、飛行場だった場所から聞こえてきたとか。」

「第二次世界大戦当時、天皇陛下を守るための地下道が存在し、皇居から印旛飛行場までをつないでいた。そこには皇居から無事に天皇陛下を送り届けようとした役人たちのさまざまな葛藤や人間模様があった。」

記事に載せられないようなものも含め、他にもさまざまな投稿が寄せられた。地下道があるなら飛行場へ行かず隠れていた方が安全な気がするが、かつて草深の空を航空機が飛び交っていたのは事実である。

この飛行場は航空機乗員養成所として一九四二年に設置され、一九四四年ごろから軍用飛行場としても利用されるようになった。終戦直前には米軍戦闘機が飛来し、若者たちが命を落としたという。二〇〇三年には跡地の一角に位置する西の原公園に「平和の碑」が設置された他、現在も掩体壕（軍用機を敵機から守るためにつくられた格納庫）の跡地を見ることが出来る。

とはいえ印旛飛行場といえ、二十五年前の奇怪な事件を思い出す方も多いだろう。「印旛の謎を読み解く」と銘打っている以上、やはりこの事件に言及しないわけにはいかない。

一九九六年十一月、草深の掩体壕から二百メートルほどの一軒家で、小学校五年生の飛井竜樹くん（仮名）がナイフで胸を刺され死んでいるのが見つかった。父親の博彦、母親の空美、妹の佐奈（いずれも仮名）が在宅していたにも関わらず、犯人は誰にも気づかれることなく竜樹くんの部屋へ忍び込み、亡霊のように姿を消してしまったのである。

二〇二一年一月、ぼくは知人の紹介で、母親の空美さんに話を聞くことができた。ここからはインタビューの内容を抜粋して紹介する。「竜樹はとても怖がりでした。三つ下の佐奈の方が肝が据わっていたくらいです。草深に飛行場があったことを学校の先生に教わって以来、竜樹は夜の外出を怖がるようになりました。パイロットの幽霊が自分を見ていると言わんです。わたしは真面目に取り合いませんでした。今思うと竜樹の言ったことは正しかったのかもしれない」

そこで空美さんは赤く腫れた目を強く押さえる。「事件が起きたのは金曜日の夜でした。七時から家族四人で夕食を取り、竜樹と佐奈は二階のそれぞれの部屋へ戻りました。佐奈は宿題を、竜樹はゲームでもしていたんだと思います。わたしは夫とリビングでつまらないドラマを観ていました。」

飛井竜樹を殺した犯人——それは彼の母親、空美である。

竜樹が悲鳴を上げたとき、空美は夫の博彦とリビングでドラマを観ていた。一見すると息子を殺すのは不可能だったように思える。

空美は事前工作を行っていた。航空帽とゴーグルを購入し、竜樹の部屋の内側のドアノブに引っ掛けておいたのである。竜樹は食事を終えると、自室に戻り、ゲームを始めた。だが何かの拍子にふとドアを振り返ると、パイロットの頭が浮かんでいるように見える。日頃から幽霊に怯えていた竜樹は、悲鳴を上げて意識を失った。

なぜ空美は息子を殺したのか。怪我で病院へ運ばれてくる子どもには、一見すると献身的な親から虐待を受けているケースがあるという。この手の親はわざと子どもに怪我をさせ、熱心に面倒を見る姿を人に見せることで、同情を集めようとするのである。空美もこれに近い性向があったのではないか。事件から二十五年経ってもなお、どこかの馬の骨とも分からない作家のインタビューに答えたことが何よりの証拠である。

空美さん、竜樹くんを殺したのはあなたですね？

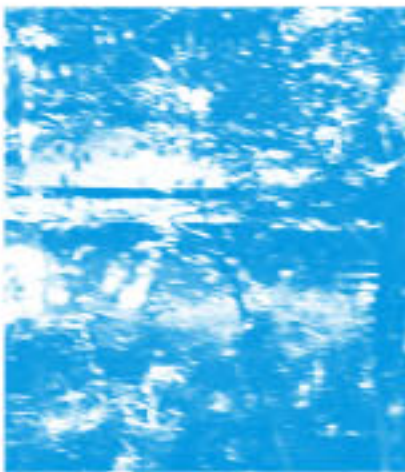


最後の謎

いよいよ最終回である。ジャンプの連載でもないのに特に感慨もないのだが、まだ取り上げていない投稿がいくつか残っている。お焚き上げも兼ねて、採用できなかった題材をまとめて紹介しておく。

「惨殺屋敷」

最初に編集者と打ち合わせたとき、絶対に取り上げようと決めたのがこれだった。詳細は伏せるが、市内某所に一家惨殺事件が起きたと噂される家があるという。勇んで現地取材にまで出かけたが、いざ書こうとすると手が止まってしまった。推理作家に惨殺屋敷を題材に小話を書けというのは、和菓子職人に餡子で何かつくれというようなものだ。普段やっていることと同じだし、まじめに書いたら四百枚の原稿になってしまふ。そう気づいたら気持ちが萎んでしまった。



“レイライン”

地図を眺めていると、遺跡やら寺社仏閣やらが一直線に並んで見えることがある。この直線をレイラインと呼ぶらしい。印西市は鹿島神宮と伊勢神宮を結んだレイライン上に位置しているそうで、神秘的な力に導かれUFOが寄ってくるのだとか。印西市が宇宙人に気に入られるのは結構なことだが、これは推理作家ではなくオカルト研究者が取り上げるべき題材である。

“双子公園のナウマン象”

印旛沼のほとりの双葉公園にはナウマン象の像(ややこしい)がある。印旛捷水路の工事中にナウマン象の化石が発見されたことになんて作られたものらしい。

動物の置き物といえばミステリー好きの方は思い浮かぶ作品があるかもしれないが、こちらのナウマン象は宙に浮かぶ気配もない。せめて夜に歩き回るといふ噂でもあれば良かったのだが、ただ突っ立っているだけでは取り上げられなかった。



“白樺の行列”

北総花の丘公園のEゾーンでは、白樺の木が二〇〇メートルほど真っすぐ並んでいるのを見ることが出来る。何十年も前から生えているはずの木々がなぜ列をなしているのか。投稿者の方の推察では、かつてそこに通学路があり、子どもたちを風雨から守るために木が植えられたのではないかとのこと。これより説得力のある屁理屈が思いつかず取り上げられなかったが、こうした何気ない風景に疑問を見つけた方こそが本当に豊かな人生を送っているのではないかと、プラタモリを見てよく思う。

“三角形の土地”

牧の台三丁目に三角形をした謎の緑地があると投稿があった。加門七海先生の『怪談徒然草』(角川ホラー文庫)に収録された『三角屋敷を巡る話』によれば、三角形の土地には神や魔物が宿っており、人が住むとろくな目に遭わないのだという。牧の台三丁目の三角形は緑地だが、取材してみれば何か恐ろしいことが起きているかもしれない。そう思ったばかりは、手始めにこの土地をGoogleMapで調べてみることにした。すると――



四角形だったのである。

まとまりのない最終回になったが、この訳の分からない企画に投稿を頂いた方には改めてお礼を申し上げる。連載を読んで印西市が変な街だと気づいた、それなりにまともな街だと思っていたが目が覚めたという方がいたら、市がほく小銭を払った甲斐もあったというものである。なお、これでは物足りない、もっと千葉ニュータウンの住人が大変な目に遭うお話が読みたいという方は、ぜひ拙著『東京結合人間』をお読みください。



挿絵

平木 元

次年度予告

Next year Notice

21年度も、新しいプロジェクトを続々進行中！！

● 01

あのプロジェクトが新たな装いで帰ってくる……？

新PR動画公開！？

● 02

皆で遊ぼう！ Make Inzai Original かるた

● 03

ほかにも、インザイを面白くする

新しいプロジェクトが進行中です！



メイクインザイオリジナル
Year 02 20-21

二〇二一年三月発行

企画	株式会社ポニーキャニオン
編集・制作	株式会社BAKERU*ondo 鈴木聡
デザイン	BAKERU (大沢景、花見堂直恵、サカヨリトモヒコ)
イラストレーション	齋藤俊輔
撮影	平木元
H P : デザイン	阿部隆大 (p.7)
コーディング	Daisuke Yoshida (SLEEP)
印刷・製本	Yuuki Noguchi (ng)
発行	歩プロセス
電話	印西市企画財政部シティプロモーション課 千葉県印西市大森二二六四一 〇四七六―三三―四四二六(直通)

連載企画に加えて、 印西市の新しい企画も 発信中！

印西市では、当メディア以外でもさまざまな企画を進行中。おでかけ体験型メディア「SPOT」での印西市提供企画や、ここだけの最新プロジェクト情報など、印西の新しいPRの試みをリアルタイムでお届けしています。また「インザイのジンザイ」のインタビューや、「印西妄想落語」の紹介記事など、本冊子には未収録の各読み物も楽しめます。



皆さんからの「オリジナル」な情報も お待ちしております！



メイクインザイオリジナルは、今年度の「ミステリー」のように市民投稿型のコンテンツも随時発信中。お問い合わせフォームより、新しいネタやご意見、プロジェクトについてのご質問などを受け付けています！興味のある方は、是非ご連絡ください。

お問合せメール：contact@makeinzaioriginal.com



メイクインザイオリジナル 🔍

MAKE INZAI
ORIGINAL

makeinzaioriginal.com



MAKE INZAI ORIGINAL
メイクインザイオリジナルは、ホームページで随時更新中！